おじいちゃんの完璧なパーティー

もし雨がやまなかったらどうしよう。

雨がやまないこともあります

すべてのいのりが，アレックスのいのりのようにすぐにこたえられるわけではありません。それでも，神様はいつでも耳をかたむけ，わたしたちを祝福したいと思っておられます。物事がうまくいかないように思うときでも，神様は何がいちばん良いかをごぞんじだと信じることができます。

デビッド・ディクソン
（ほんとうにあった話をもとに書かれました）

このお話はサモアでの出来事です。

黒く，どんよりとした雲が空にかかっています。アレックスは雲をにらみつけました。

ガラガラガラ！

かみなりがまた鳴りひびき，大きくて重たい雨つぶがそこらじゅうにふり注ぎます。

アレックスは首をふりました。これじゃあだめだ。ぜんぜんだめだ。サモアでは時々，何日も雨がやまないことがあります。それでもアレックスは，おじいちゃんの誕生日を完璧なものにしたいのです！

アレックスは自分の部屋に行き，ベッドの横にひざまずきました。

「愛する天のお父様」とアレックスは言いました。「明日のおじいちゃんの誕生日パーティーまでに雨をやませてください。もう招待状も送ってあるんです。イエス・キリストの御名により，アーメン。」

アレックスが立ち上がると，ママとパパがドアのところに立っているのが見えました。二人ともほほえんでいました。

「おいのりを聞いてしまって，いやだったかしら」とママが言いました。

アレックスはにっこりしました。「大丈夫だよ。ぼくはただ，明日をおじいちゃんにとって特別な日にしたいんだ。家の中にいなきゃいけなかったら残念だし。おどる場所がなくなっちゃうからね！」

パパはアレックスのかたをギュッとだきました。「どんな天気でも，アレックスがどれだけおじいちゃんを愛しているか，おじいちゃんにはきっと伝わるよ。」

次の朝，ママとパパはアレックスに家族のいのりをするようたのみました。雨は*まだ*はげしくふっています。しかも，*まだ*やみそうにありません。

「パーティーに間に合って雨がやむように祝福してください」とアレックスは言いました。「そして，みんなが楽しくすごせるように祝福してください。特におじいちゃんが楽しくすごせますように！」

アレックスは午前中ずっと空を見ていました。長い間，何の変化もありません。ところがそのとき，思いがけないことが起こりました。

「見て！」アレックスは大声を上げました。「少しだけ青い空が見えるよ！」アレックスの家族は庭に飛び出しました。雲が晴れ始めています。

数時間後，雲はすっかり消えてなくなりました。地面の水たまりさえもかわいてしまいました。アレックスは急いで庭のかざり付けをしました。おじいちゃんとお客さんたちが来るのはもうすぐです。

イラスト／オーガスト・ザンボナト

おじいちゃんは到着すると，びっくりしていました。照明や色とりどりの紙のかざり，大勢のお客さんに目をやりました。「どれもすごくきれいだよ」とおじいちゃんは言いました。「どうもありがとう！」

パーティーはアレックスの期待どおりの楽しさでした。みんながおじいちゃんのお気に入りの歌に合わせておどりました。食べ物はおいしく，特にあまいココナッツのパンは最高でした。アレックスはおじいちゃんと一緒に歌まで歌いました。

いちばん盛り上がったのは，*シヴァ・タウアルガ*のときでした。このダンスは，いつでもその日いちばん大切な人がおどります。そしてもちろん，それはおじいちゃんでした！

おじいちゃんはおどるために立ち上がりましたが，アレックスの方を見ました。「アレックス，一緒におどろう！」と，おじいちゃんが言いました。アレックスはとびはねるように立ち上がり，おじいちゃんのとなりでおどりました。すぐにほかのみんなもおどり始めました。

おじいちゃんが身をかがめて，アレックスをだきしめました。「今日はアレックスのおかげでとびきりいい気分だ」とおじいちゃんは言いました。「*完璧な*誕生日パーティーだったよ。」

パーティーが終わると，アレックスは空を見上げました。黒くぶあつい雲がもどって来ていました。雨がまたもや頭の上にふってきました。けれども，今度はアレックスは気にしませんでした。おじいちゃんのパーティーが終わるまで天気がもつよう，天のお父様が助けてくださったことを，アレックスは知っていました。

「良い天気にしてくださってありがとうございます」と，アレックスはいのりました。「それから，こんなにすばらしいおじいちゃんがいてくれることに感謝します。」●